



PRIMCED Newsletter

No. 4 (June 2012)



目次

全体会議に向けて 〔黒崎 卓〕 ...1~2

【連載】調査活動報告 ...2~5

No.5 マカピリ 〔神門 善久〕

No.6 「戦前期農家経済調査」データベース編成作業について 〔高島 正憲〕

全体会議のご案内 ...6

ディスカッションペーパー ...6



全体会議に向けて

黒崎 卓 (研究代表者)

PRIMCED も 3 年目に入りました。5 年間のプロジェクトのちょうど中間年度です。これまでの 2 年間で、現アジア・アフリカ両地域と高度経済成長以前の日本を中心に、制度や組織に注目した独自のデータ収集を行うことに関しては、かなりの進展が見られたと考えております。

これらのデータをもとに、長期経済発展プロセスにおいて制度や政策がどのように採択されるのか、その効果はいかなるものかなどについて実証的に分析すること、そしてこのような実証分析を複数時点・複数地域に関して統一的に行うことにより新しい比較経済発展論の構築を目指すことが、PRIMCED プロジェクトの分析面での目的です。今年度の終わりには中間評価も控えていることから、この目的に向けて、これまでの研究成果の共有と、分析枠組の統合に向けた議論を行うために、2012 年 6 月 29-30 日と、7 月 20 日の延べ 3 日間の全体会議を企画いたしました。皆様の活発なご参加を期待しております。全体会議の議論を受けて、PRIMCED の中間研究成果を、内外の関連研究者や開発の現場に携わる人たちに披露し、そのコメントを受けて、今後の必要な作業を明らかにするための国際ワークショップも、2013 年 3 月 8-9 日に計画してお

りますので、皆さまのご予定に入れておいてください。一橋大学ではまた、この 2 つの会議に挟まれた 2012 年 9 月 13-15 日に国際会議 Asian Historical Economic Conference (AHEC2012)も開催され、PRIMCED メンバーの多くが研究報告を予定していることも補足しておきます。

さて、長期経済発展について考える上で刺激を受けた最近の本 2 冊を紹介いたします。第 1 は、A.V.バナジー & E.デュフロ著、山形浩生訳『貧乏人の経済学：もういちど貧困問題を根っから考える』みすず書房、2012 年 (Abhijit V. Banerjee and Esther Duflo, *Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty*, Public Affairs, 2011)です。現代の開発経済学を率いる第一人者であるデュフロとバナジーが、サックス流のビッグプッシュ論もイースタリー流の市場原理・自助努力論もどちらもイデオロギーにすぎず、ランダム化対照試行(RCT)によって効果が客観的に検出された小さな介入を積み上げていくことこそ、途上国の貧困削減には重要だと主張を繰り広げるのが本書です。バナジーとデュフロが途上国の現場で観察した逸話と、徹底した RCT に基づくエビデンスとを積み上げて展開されるストーリーに、つい引き込まれます。



行動経済学の知見を現代途上国の貧困層に当てはめて制度を説明するところは鮮やかです。

とはいえ私は、現代途上国の貧困層を対象にした RCT だけを材料にして「小さく考える」(thinking small) という本書の主張に、強い違和感を覚えました。国レベルで貧困削減を達成した過去の歴史的事例を経済学的にどう理解して、それを現代の開発問題にどう生かすかといった大きな考え方(thinking big)は有害とみなすのが本書のスタンスです。Thinking big 抜きに貧困削減は考えられないという点については、*Journal of Economic Literature* 誌の 2012 年 3 月号 (50 巻 1 号) において、Martin Ravallion と Mark R. Rosenzweig がそれぞれ本書の書評論文を掲載しており、わが意を得たりという感じです。

もう一冊は、佐藤孝宏・和田泰三・杉原薫・峯陽一編『生存基盤指数：人間開発指数を超えて』京都大学出版会、2012 年です。本書は、京都大学グローバル COE プロジェクト「生存基盤持続型発展を目指す地域研究拠点」の成果であり、生存基盤の持続的発展の方向を明らかにするために生存基盤指数を作成し、その結果と含意を示す著作です。生存基盤指数とは、地球圏・生命圏・人間圏それぞれにおいて可能性・関係性・攪乱の 3 つの領域に対応した指数を（攪乱に関してはマイナスの符号をつけて）集計して、ある地域の生存基盤の強固さを示すスカラー値です。地球圏の可能性指数とされる太陽エネルギー（純放射量）や、関係性指数とされる年間純降水量、生命圏の攪乱指数とされ

る人間活動による純一次生産量の収奪量、人間圏の攪乱指数とされる不測の死（地球圏からの攪乱として地震・津波・洪水・火山噴火による粗死亡率、生命圏からの攪乱としてマラリヤ・HIV・結核による粗死亡率、人間圏内の攪乱として紛争・自殺・他殺による粗死亡率の 3 変数を集計したもの）などが、地球上でどのように分布しているかを示す地図が、本書には多く収められており、現代途上国の今後の経済発展を考える上での示唆に富みます。

他方、個別の変数・指数がなぜそのような符号をもって最終的に生存基盤指数に集計されるかの論理構造、言い換えると評価の軸が、本書には明確に示されていません。地球圏、生命圏そのものの論理によって評価するとの記述はあるのですが、説明不足と感じます。人間の生存論理を軸に地球・生命・人間圏の各変数を評価し、政策や経済活動によって敏感に変化するような生存基盤指数を私は本書に期待していたのですが、期待外れでした（詳しくは『社会経済史学』での拙書評参照。近刊予定）。

逆説的な意味も含むのですが、両方の本から PRIMCED へのエール、すなわち、より長期の視点（歴史・大局）、より経済学的な視点（インセンティブ構造）を重視することが比較経済発展論には不可欠だとのエールをいただいたと、勝手に解釈しております。皆さまならどのように読まれるでしょうか。全体会議などの席で議論を続けることができれば幸いです。

調査活動報告

連載 No.5

マカピリ

神門 善久
(明治学院大学経済学部)

マカピリってわかります？ 第二次大戦中に日本軍に協力したフィリピン人組織のことです。実は、私も知らなかったのです。マニラのホテルの一室で、NHK ワールドの特番を見るまでは。

私は、ふだん、テレビをみません。18 歳で郷里を離れたとき以来、7 年前に結婚するまで、住むところにはテレビを置かないようにしていたのです。おかげで、すっかりテレビをみないことが習慣になっています。

でも、たまたま、ホテルで運転手の到着を待つまで、何となくテレビを点けました。偶然にも、NHK ワールドがフィリピンのドキュメンタリーを日本語の字幕スーパーつきで流していました。

みていて、胸が痛かったです。悲しかったです。戦後、何十年経っても、マカピリだった家の血筋は蔑視されています。就職や結婚も不利です。番組の冒頭では、マカピリの血筋であることが相手に知られ、婚約が破棄されたお嬢さんが、「死にたい」と泣きながら家で臥しているシーンがありました。

この番組でハイライトを当てたのは、元マカピリのお爺さんです。といっても第二次大戦中は少年で、お父さんに付き従っていただけです。お父さんは厳しいリンチを受けましたが、当時少年だったそのお爺さん

はリンチは免れました。しかし、マカピリの過去があるかぎり、社会からは受け容れられません。辛苦をともにした妻には先立たれ、子供たちも去っていき、いまは、視力も失って、一人暮らしです。手探りで食事の支度をするのですが、割った卵がフライパンに入らず、床に落としてしまいます。「仕方がないよ。神様が一人で生きていけと言っているのだよ」とつぶやきます。

そもそも、マカピリの多くは、極貧層の出身です。どうせ、いまのままでも、ろくな人生はない。日本軍がやってきたとき、事態を変えてくれるかもしれないというかない期待から、日本軍に協力しました。

元マカピリのお爺さんは、テレビの記者に昔話をしているうちに、少しご機嫌がよくなって、「マカピリの歌を歌ってあげよう」と言います。「マカピリは強い。いつも日本の兵隊さんと一緒…」そこまで歌って、突然、大声で泣き始めます。「ごめんよ。仲間を思い出した。もう歌えない」、泣きながら謝るのです。

同じ世代の人たちでも、親米組織に入った人たちは英雄です。年金も加算され、いまでも、昔の仲間とにぎやかに親睦会を開いています。この元親米組織の人たちと、マカピリの対話会を開こうとフィリピン大学の学生が企画しました。親睦会に出向いた学生が、その提案をします。リーダー格の人が、「いいんじゃないか。もう昔のことだ」と言います。しかし「あいつらになぜ会わなくてはいけないのだ」と激昂して、立ち去る人たちもいます。

対話会の日、元マカピリのお爺さんは同じく元マカピリの友人と二人で会場に出かけていきます。会場に入るや、「人殺し」「裏切り者」「おまえのおかげで何人、殺されたと思っているのか」と容赦ない罵声があびせられます。お爺さんはじっと聞いています。ひとしきり罵声が続いた後、お爺さんは「今日、私は、聞いてもらいたいことがあります」と話を始めます。

私にとってもフィリピンの日本軍というのはヒトゴトではありません。私は家庭の事情で、2歳から4歳にかけての3年間、近所の森川さんという日本通運の夫婦の家に預けられていました。その森川の小父さんが、フィリピンに従軍していました。豪快な小父さんですが、反骨の気概もある人でした。こっそり、軍隊での日々をメモに残していて、復員兵の協会から助力を得て、全12冊の日記に纏めて出版もしています。なれない気象に悩むなか、ロジが整わず、劣悪な兵隊生活です。発狂して自死した戦友など、なまなましい記述もあります。でも、小父さんにも、日記にしなかったフィリピンでの出来事がたくさんあったでしょう。

森川さん夫妻は、私の恩人です。私は家族から「よ

しぼう」と呼ばれていますが、これも、森川さん夫妻が私をそう呼んでいるうちに、私の家族も真似するようになったのです。私を預かる直前に森川さん夫妻はお嬢さんを病気で失っていました。亡くなられた娘さんの分の愛情まで、私に注いでくださったのでしょうか。

いろいろなことを思い出し、空想し、ただただテレビの前で私は嗚咽しました。よりによって、こういうタイミングで、こういう番組をみてしまいました。

約束の時間が来ました。運転手がホテルに到着しました。モリーンといます。フィリピン大学の先生に紹介してもらった運転手です。モリーンは、サウジアラビアなどいろいろなところで出稼ぎ運転手をしていたこともあります。フィリピン国内でも、緑の革命で主導的役割を果たしたことで有名なIRRI（国際米研究所）で長く働きました。今は、フリーで運転手をしていますが、真面目で、機転が利いて、信頼できます。フィリピンのように公共交通機関が発達してなく、道路事情が悪いところでは、こういう運転手に恵まれるかどうか、調査の成否を分けます。

頭もよく、性格もよいモリーンですが、小学校しか出ていません。進学する経済的余裕がなかったのです。私はNHKワールドの番組をみていて、モリーンの出身地も貧農が多く、マカピリに加わった人たちも多い地域であることに気づきました。

ホテルの自室で顔を洗い、私はモリーンの車に乗り込みました。私は心の中の慟哭を押し殺し、平静を装うのに精一杯でした。モリーンも私の様子がおかしいことに気づいているようでした。

いまでも、フィリピンでは、ハボンという言葉が、日本人を指すと同時に、傲慢な強奪者の隠喩をこめられて使われることがあります。マカピリや現地妻を置き去りにして、日本軍は撤退をしていきました。悪名高い従軍慰安婦もありました。日本軍に人生を弄ばれた人たちの傷を、あまりいまの日本人は意識していないように感じます。

善良なふりをしていますが、私も、ハボンです。きっと、傲慢な強奪者の要素を持っています。それは国籍の問題ではなく、人間の性です。歴史を研究するというのは、そういう人間の危うさを知ることでないでしょうか。

このPRIMCEDのプロジェクトで、私は、学校教育を通じた人的資本の蓄積過程が経済発展にどのような影響を与えたかを分析しています。あちらこちらにちらばった情報から、長期分析に堪える教育ストックのデータベースを構築しようとしています。統計数値の背後にあるひとりひとりの人生に思いを馳せたいと思います。

連載 No.6

「戦前期農家経済調査」データベース
編成作業について

高島 正憲

(一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程/
グローバルCOEフェロー)

一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センターでは、京都大学に保管されている戦前期の農林省農家経済調査資料について、2000年より調査を行っています。農家経済調査資料とは、帝国農会、農商務省、農林省によって1913年から実施された、農家の経営・経済活動についての統計資料です。調査対象農家は各都道府県から自作・自小作・小作別に抽出された複数の標準的な農家で、その調査事項は、農家の財産、生産、労働、消費など多岐にわたり記載されています。調査結果については、全国集計分については各年度版がそれぞれ刊行されており、年度ごとの農家の経済状況の概況を調べることが可能ですが、本事業では、1931（昭和6）年から1941（昭和16）年までの間について、資料の個票からパネルデータを編成する作業をおこなっています。この期間は、農家経済がちょうど昭和恐慌の深刻な影響を受けた時期から回復過程を経て戦時期へと突入する時期に該当します。

作業は現在も進行中ですが、それと同時進行で個票データを利用してどのような分析ができるか試行的研究もおこなっており、徐々にではありますが研究成果も出つつあります。ここでは、農家経済調査資料に長年かかわってきて感じたことを色々と述べたいと思います。



京都大学の書架にぎっしりとつまった資料

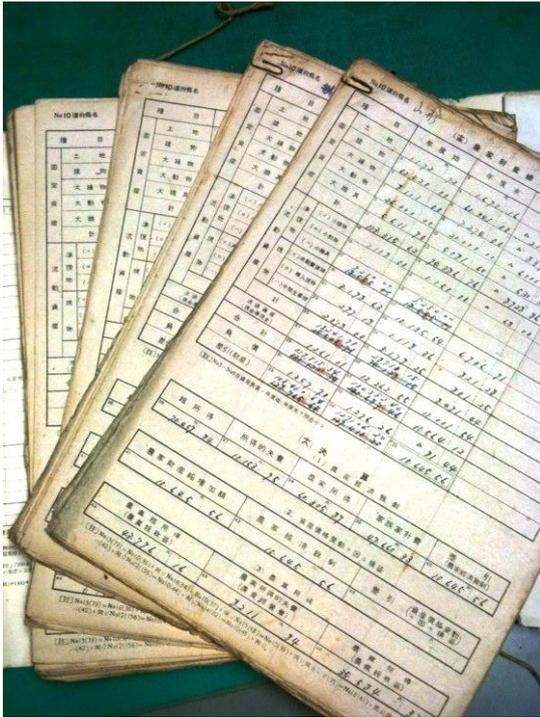


資料の多さに頭をかかえる

資料調査の方法は、いくつかの段階をおって行われています。(1)毎年数回の出張調査を実施して、京都大学の書庫に保管されている原資料の状況と点数を確認します。(2)概要が記録された資料は業者に依頼してマイクロフィルムで撮影され、フィルムが一橋大学へ納品されます。(3)マイクロフィルムを1コマずつ紙に打ち出して、これを見ながらデータ入力をし、(4)最後にそれら入力データを再確認することでようやく終了となります。これだけだとシンプルな作業のように思われますが、個票データは1県あたり10,000コマ前後になるので、想像以上に時間がかかる作業です。予算や人員の都合もあって、実際には年に3、4県ほどしか作業を進めることができませんでしたが、マイクロフィルム撮影については、昨年度で全都道府県分を終了することができました。

調査およびデータ入力は、各農家1戸ずつ1枚ずつ個票の内容を確認する作業をしていますが、資料は60年以上前、古いものでは100年近く前に作成されたものもあります。古い資料は少しさわっただけで破れてしまうような劣化したものも多く、取り扱いには注意が必要です。また、昔の資料はいわゆる「くずし字」や、調査票の記入者にしか分からない省略語で書かれているものもあり、その判読と内容の理解にも一苦労でした。

ところで、京都への資料調査というと皆さんはどのようなイメージをもたれるでしょうか？場所が京都なので、よく周囲からは羨ましがられたりしましたが、



調査個票

実際のところは「調査」というよりは「苦行」に近かったかもしれません。というのも、毎日薄暗い書庫でホコリにまみれての作業で、しかも書庫には冷暖房と窓がないため、夏は灼熱、冬は極寒という厳しい環境下での作業でしたので、古都へ出張のイメージとは全くかけ離れた過酷なものでした…。

以上のような作業を経た結果が最終的にデータベースとなって、様々な手法によって分析されることとなります。今こうして、これまでの作業をふり返ったとき、普段我々研究者が利用している数値データ、特に歴史的データというものは、実は地道な作業の積み重ねによって作られていることを痛感します。

また、最終的に完成するパネルデータには、普通は数値データのみが反映されることとなりますが、その過程で消えていく情報に接することができるのもまた資料調査の醍醐味でしょう。一番多いのは家族状況にかんする情報で、実際の生活状況について具体的な様子を知ることができます。特に、農家の主人の戦地への応召や病気による影響は、単に労働力だけでなく、農家という小さな事業体における経営者の損失という

意味があります。また、経営状態が非常に悪い農家があり、その原因は、実は主人が酒好きで博打好きだったからということがわかったりもします。そうした情報はなかなか数字からは読み取りにくいものです。勿論、研究内容や目的によって、こうした情報が必要でない場合もありますが、原資料にある補足情報や欄外に書かれた注意書きは、当時の記入者が数字では表現できない部分について言いたかったことなのかもしれません。こうした情報は、後になってデータ分析の際に重要な手がかりになることもあります。

近年 IT 技術の飛躍的な向上によって、研究環境は以前にくらべて随分便利な時代になりましたが、その一方で、加工済みでない生の資料からダイレクトに情報を得ることのできる資料調査とは、歴史に接する者には重要な作業の1つではないかと、この作業に関わることで改めて強く感じました。



マイクロフィルムから打ち出された資料は製本され
一橋大学で保管されています

全体会議のご案内

巻頭の「全体会議に向けて」にてご案内のとおり、2012年6月29-30日および7月20日の延べ3日間の全体会議を下記の要領で開催いたします。皆様のご協力をお願い申し上げます。なお、最新版のプログラムは PRIMCED ウェブサイト (<http://www.ier.hit-u.ac.jp/primced/index.html>) にてご確認ください。

日時： 2012年6月29日(金)-30日(土)、7月20日(金)

場所： 一橋大学経済研究所 4階会議室 (〒186-8603 東京都国立市中2-1)

幹事： 黒崎卓 (kurosaki@ier.hit-u.ac.jp) / 道中真紀 (mitinaka@ier.hit-u.ac.jp)

*配布資料等準備の都合、報告者以外の出席希望者は事前に道中までご連絡いただくと幸いです。

*報告者の皆様には、報告週の月曜日(6月報告者は6月25日、7月報告者は7月16日)までに、配布資料のファイルを道中までご送付いただきますよう、お願い申し上げます。

ディスカッションペーパー (2012.3 ~ 2012.6)

No. 23 (March 2012) 草処基・丸健・高島正憲 「昭和恐慌からの農村復興期における農家の資産蓄積行動：農林省第3期農家経済調査パネルデータによる分析」

No. 24 (March 2012) Takashi Kurosaki, "Urban Transportation Infrastructure and Poverty Reduction: Delhi Metro's Impact on the Cycle Rickshaw Rental Market."

No. 25 (March 2012) Yoshito Takasaki, "How is disaster aid allocated within poor villages?"

No. 26 (March 2012) Fumiharu Mieno and Hisako Kai, "Do Subsidies Enhance or Erode the Cost Efficiency of Microfinance? Evidence from MFI Worldwide Micro Data."

No. 27 (April 2012) Takashi Kurosaki, Humayun Khan, Mir Kalan Shah, and Muhammad Tahir, "Household-level Recovery after Floods in a Developing Country: Further Evidence from Khyber Pakhtunkhwa, Pakistan."



PRIMCED Newsletter, No. 4 (June 2012)

編集・発行 一橋大学科学研究費(基盤S)プログラム「途上国における貧困削減と制度・市場・政策：比較経済発展論の試み(PRIMCED)」事務局

〒186-8603 東京都国立市中2丁目1番地
一橋大学経済研究所附属経済制度研究センター内

TEL: 042-580-8405 Fax: 042-580-8333

E-mail: primced@ier.hit-u.ac.jp

URL: <http://www.ier.hit-u.ac.jp/primced>